

日中会話におけるポライトネス・ストラテジー

平, 静

松村, 瑞子

九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門 : 教授 : 言語教育学講座

<https://doi.org/10.15017/19183>

出版情報 : 言語文化論究. 26, pp.73-84, 2011-02-07. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

日中会話におけるポライトネス・ストラテジー

平 静・松 村 瑞 子

本稿は Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論に基づいて、異なる言語体系や文化を背景とする日中両言語における実際の会話資料を用いて、より円満なコミュニケーションを行なうために、様々なポライトネス・ストラテジーがどのように使用されているのかを分析していく。Brown & Levinson (1987) は、ポジティブ・ポライトネスを3カテゴリー、ネガティブ・ポライトネスを5カテゴリーに分類しているが、本稿では日本語と中国語の実際の会話において夫々のカテゴリーがどのような分布状況を見せるかを調べた後、詳しい談話分析を行った。その結果、日中両言語のポライトネスにおける最大の相違は、ネガティブ・ポライトネスに対する使用上の認識の違いであることがわかった。さらに、談話分析を行うことによって、ネガティブ・ポライトネスを表現する言語体系およびその体系に対する認識の相違が、両言語におけるポライトネスに対する意識と敬意を示すやり方に最も大きな影響を与えていることが分かった。

【キーワード】：敬語体系、ポライトネス理論、ストラテジー、会話の含意

1. はじめに

日本語と中国語の敬語には類型上の違いがあり、中国語には日本語敬語の文体のような言語形式が存在していない (母, 2002)。そのため、中国語母語話者が日本人とコミュニケーションをする際に、「ある場面で、『自分』が表現しようとしていることを『話し相手』に配慮して丁寧に伝えるためには、どういう『敬語』を使って、どんなふうに表現していけばよいのか」ということが最も難しい点の一つである。

近年、この日本語の敬語についての理解を促進するために、欧米におけるポライトネス (politeness) 理論の観点からの研究が行われてきた。中でも、Brown & Levinson (1987) (以下 B & L) のポライトネス理論は、ポライトネスに関する理論としては最も代表的なものであり、この理論に基づいて数多くの研究が行われてきた。B & L (1987) では、敬語を有する言語、そうでない言語にかかわらず、ポライトネスが人間の言語行動の中に存在する普遍的な要素であると指摘されている。このような前提にたってポライトネスが分類されているため、日本語と中国語のように類型上の異なっている言語間のポライトネスを、同一の土俵で対照させるのには好都合の理論である。

そこで本稿では、宇佐美 (2001) に倣い、B & L (1987) が提唱するように「ポライトネス」の定義を「円滑な人間関係の確立・維持するためのストラテジー」とする¹⁾。中国語のポライトネスは、「中国語の敬語の待遇的な意味効力はその表現の文字通りの意味内容を介して伝えられた会話の含意に属する意味内容である」(彭国躍, 1993) と言われているが、中国語を母語とする日本語学習者が、日本語のポライトネスを理解するためには、前述したように日本人が実際の会話場面でどのようなポライトネス・ストラテジーを使用しているのかに注目することが不可欠である。そこで、本

稿では、実際の会話を研究資料として、B & L の分類に基づいて日中ポライトネスの対照研究を行なうこととした。

B & L によるポライトネスを簡単にまとめると以下のようなものである。即ち、全ての人間にはポジティブ・フェイス（誰かに認められたいという欲求）とネガティブ・フェイス（誰にも邪魔されたくないという欲求）があるが、このフェイスを脅かさないように配慮して円滑なコミュニケーションを維持していこうとする言語行動がポライトネスである。相手のフェイスを脅かすような行為（face threatening act、以下 FTA）を行わなければならない場合、急を要するためフェイスなど言っではいけない場合を除けば、話し手はできるだけ相手のフェイスを脅かさないように配慮する。例えば、フェイスを脅かすくらいなら FTA を行わなかったり、比喩や曖昧な表現を使って FTA を仄めかすだけにしたり、FTA と共に何らかの補償行為を行うなどのストラテジーを用いる。この補償行為のうち相手のポジティブ・フェイスに訴えかけるもの（例えば、方言、内輪語、俗語を用いることで話し手と聞き手が仲間であることを示したり、聞き手の欲求に関心を示したりする）がポジティブ・ポライトネスであり、ネガティブ・フェイスに訴えかけるもの（例えば、聞き手に抜け道を残すことで強制を避けたり、謝罪をしたりする）がネガティブ・ポライトネスである。

B & L は話し手（以下 S）と聞き手（以下 H）との関係からポジティブ・ポライトネスの 15 個のストラテジーを以下の 3 つのカテゴリーに、そしてネガティブ・ポライトネスの 10 個のストラテジーを以下の 5 つのカテゴリーに分類している。

ポジティブ・ポライトネスの 3 つのカテゴリー：

A : Claim common ground（お互いの共通の基盤を示せ）ⁱⁱⁱ：

ストラテジー 1-8

B : Convey that S and H are cooperators（自分と相手は協力関係にあることを伝えよ）：ストラテジー 9-14

C : Fulfill H's want for some X（ある X に対する相手の欲求を満足させよ）：

ストラテジー 15

ネガティブ・ポライトネスの 5 つのカテゴリー：

a : Be indirect（間接的に言え）：ストラテジー 1

b : Don't presume / assume（推定・想定するな）：ストラテジー 2

c : Don't coerce H（相手に強制するな）：ストラテジー 3-5

d : Communicate S's want to not impinge on H（相手を侵害しない意思を持つことを伝えよ）：ストラテジー 6-9

e : Redress other wants of H's（相手のほかの欲求を補償せよ）：

ストラテジー 10

本研究は、B & L のこの分類に従って、日本語と中国語におけるポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの各ストラテジーの分布状況を調べる。次に、談話中の各々のストラテジー使用実態を分析することで、両国言語におけるポライトネス・ストラテジーおよびポライトネスに対する認識の相違を明らかにすることを目的とする。

2. データ

使用したデータは、日中で放映されたインタビュー番組を録音・文字化したものであり、中国20人、日本21人の計41人の会話文字化資料である。インタビュー番組のはじめの部分と終わりの部分を取り除き、その中から、コマーシャルなどで断続されることがなかった連続した5分間ほどの内容を取り出し、本稿の分析資料として使用した。インタビューのはじめの部分と終わりの部分を取り除いた理由は、これらの部分で司会者は、視聴者向けに、敬語を使ったり、「有難うございます」「よくいらっしゃいました」「～さんでございます」など決まった形式で挨拶したりするため、通常の聞き手に対する会話とは異なるストラテジーが使われているためである。

本論に使用される会話の対話者の社会的地位（推定上の上下関係）、年齢、性別、親しさの度合いは表1、2の通りである。

表1 中国語の調査対象者リスト

朱軍 (41) 杨澜 (38)	対話者	ゲストの年齢	ゲストの性別	社会的地位	親しさ
会話1	朱⇔常香玉	81	女	下→上	疎
会話2	朱⇔秦怡	80	女	下→上	疎
会話3	朱⇔王晓棠	70代	女	下→上	少し親
会話4	朱⇔乔榛 丁建华	60代	男 女	下→上	少し親
会話5	朱⇔翟俊杰	60代	男	下→上	疎
会話6	朱⇔余秋雨	59	男	下→上	疎
会話7	朱⇔张瑜 郭凯敏	50代	男 女	下→上	疎
会話8	朱⇔赵雅芝	49	女	=	疎
会話9	朱⇔田震	40代	女	=	疎
会話10	朱⇔崔永元	42	男	=	かなり親
会話11	朱⇔杨澜 白岩松	37 37	女 男	=	かなり親
会話12	朱⇔李亚鹏	34	男	上→下	疎
会話13	朱⇔徐静蕾	31	女	上→下	疎
会話14	杨⇔田壮壮	53	男	=	疎
会話15	杨⇔何冀平	52	女	=	疎
会話16	杨⇔赵宝刚	50	男	=	疎
会話17	杨⇔何平	48	男	=	疎
会話18	杨⇔刘欢	40	男	=	疎
会話19	杨⇔赵薇	30	女	上→下	疎
会話20	杨⇔章子怡	26	女	上→下	疎

表2 日本語の調査対象者リスト

黒柳徹子 (72歳)	対話者	ゲストの年齢	ゲストの性別	社会的地位	親しさ
会話A	K⇔塩沢とき	80	女	下→上	親
会話B	K⇔EとN (江原真二郎と中原ひとみ)	69 70	男 女	=	親
会話C	K⇔T (徳光和夫)	64	男	不明	疎
会話D	K⇔A (綾小路きみまろ)	54	男	不明	疎
会話E	K⇔T (天満敦子)	50代	女	上→下	少し親
会話F	K⇔L (島田歌穂)	42	女	上→下	少し親
会話G	K⇔I (石丸謙二郎)	41	男	上→下	かなり親
会話H	K⇔T (鶴見辰吾)	40	男	上→下	疎
会話I	K⇔I (いとうまい子)	40	女	上→下	少し親
会話J	K⇔M (前田知洋)	40	男	上→下	疎
会話K	K⇔M (松本伊代)	40	女	上→下	疎
会話L	K⇔H (早見優)	39	女	上→下	親
会話M	K⇔H (橋本志穂)	38	女	上→下	疎
会話N	K⇔R (梨花)	32	女	上→下	疎
会話O	K⇔W (河口恭吾)	31	男	上→下	疎
会話P	K⇔W (河相我聞)	30	男	上→下	疎
会話Q	K⇔L (君島十和子)	30代	女	上→下	疎
会話R	K⇔Y (YOU)	30代	女	上→下	少し親
会話S	K⇔T (武田美保)	29	女	上→下	疎
会話T	K⇔H (ホリ)	28	男	上→下	疎
会話U	K⇔G (劇団ひとり)	28	男	上→下	疎

3. ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの分布状況と分析

まず、B & L (1987) に分類されるポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの各カテゴリーについての日本語と中国語の分布状況を調べ、日本人と中国人の各ポライトネス・ストラテジーの使用傾向と特徴を分析する。

表3と表4は日中両言語の会話資料に現れた各カテゴリーの数を示したものである。

まず、この表の分布状況に基づき、日本語と中国語のポライトネスの使用傾向について分析していく。B & L (1987) は、日本社会はネガティブ・ポライトネス文化社会であると述べ、社会的距離に配慮するようなネガティブ・ポライトネスが好んで使用されると指摘している。しかし、表3と表4の数字から、日本語の場合も、中国語と同じように、Sが相手との関係（親疎や上下など）に関わらず、談話を順調に進めるために、ポジティブ・ポライトネスの各ストラテジーがよく用いられることが分かる。また、ポジティブ・ポライトネスのC「相手の欲求を満足させよ」というカテゴリーの日中の数の差から、日本語は比較的「相手の立場に立つ言語」と言えるだろう。

また、中国語はポジティブ・ポライトネス型言語（母 2001）であると言われている。しかし、中

表3 中国語のデータにおける各カテゴリーの数

	ポジティブ・ポライトネス			ネガティブ・ポライトネス				
	A	B	C	a	b	c	d	e
会話1	7	1			5	11		
会話2	9				8	18		
会話3	8				9	18		
会話4	8	2			8	11		
会話5	4				2	14		
会話6	3	1	1		6	3		
会話7	5				6			
会話8	9				3			
会話9	4			1	3			
会話10	4	4	1		1	1		
会話11	6	3			1	2		
会話12	2	3			1			
会話13	10	2			1			
会話14	6	2	2		1			
会話15	11				5			
会話16	5				4		1	
会話17	11	3			2			
会話18	8	1		1	4			
会話19	3	1	1		3			
会話20	4	1	3		2	1	1	
合計	127	24	8	2	75	79	2	0

表4 日本語のデータにおける各カテゴリーの数

	ポジティブ・ポライトネス			ネガティブ・ポライトネス				
	A	B	C	a	b	c	d	e
会話A	12				2	53	1	
会話B	8		1		1	36		
会話C	8				1	33	2	
会話D	12		2			28	1	
会話E	9	3				23		
会話F	4		2			19	3	
会話G	4					18		
会話H	2		1			10	5	
会話I	7	2			2	14	2	
会話J	6	2				21	3	
会話K	5					23		
会話L	7		1			32		
会話M	5					20	5	
会話N	6	2	2			18	1	
会話O	2		3			20	1	
会話P	10					9		
会話Q	2					24	1	
会話R	7				1	20	2	
会話S	5		2		2	21		
会話T	4			3		14	2	
会話U	8					28		
合計	133	9	14	3	9	484	29	0

国語のポジティブ・ポライトネ・ストラテジーとネガティブ・ポライトネ・ストラテジーの数を調べると、その数は殆ど同じである。中国語では、より円満なコミュニケーションを行なうために、ネガティブ・ポライトネ・ストラテジーがポジティブ・ポライトネ・ストラテジーと同様に重要な役割を果たしていると言えるだろう。中国人は相手との会話を順調に進めるために、SとHとの親密さを重視すると同時に、相手との社会的距離にも十分配慮していると言える。

さらに、ネガティブ・ポライトネスのb「推定・想定するな」(中国語47.5%：日本語1.7%)とc「相手に強制するな」(中国語50%：日本語92.2%)という二つのカテゴリーの数の差から、日中両言語のネガティブ・ストラテジーの使用傾向には大きな違いがあることが分かった。

表5 中国語のデータにおける各カテゴリーの割合

ポジティブ・ポライトネ (159)		ネガティブ・ポライトネ (158)	
A	127 (79.9%)	a	2 (1.27%)
B	24 (15.1%)	b	75 (47.5%)
C	8 (5.0%)	c	79 (50.0%)
		d	2 (1.27%)
		e	0 (0.0%)

表6 日本語のデータにおける各カテゴリーの頻度と割合

ポジティブ・ポライトネ (161)		ネガティブ・ポライトネ (525)	
A	138 (85.7%)	a	3 (0.6%)
B	9 (5.6%)	b	9 (1.7%)
C	14 (8.7%)	c	484 (92.2%)
		d	29 (5.5%)
		e	0 (0.0%)

表5と表6から分かるのは、日中両言語において、ポジティブ・ポライトネスの三つのカテゴリーの中で、A「お互いの共通の基盤を示す」というカテゴリーの中の各ストラテジーが、対話する相手の年齢や親疎などに関係なく最も頻繁に現われていることである。つまり、相手によく思われたい、親しいものとして扱われたいという「ポジティブ・フェイス」を実現するために、日中両言語で最も重視されているのは、「相手と同じ枠組みにいる」ことを示すストラテジーであると言えるだろう。

また、中国人はB「自分と相手は協力関係にある」というストラテジーを重視しているのに対して(24回 [15.1%])、日本人は自分の「ポジティブ・フェイス」を実現するために、「相手の欲求を満足させよ」というストラテジーに力を注いでいる(14回 [8.7%])ことが分かる。

ネガティブ・ポライトネスのc「相手に強制するな」というカテゴリーの中の「Give deference(敬意を払え)」というストラテジーの数については、日中両言語の間に特に大きな差が見られ、日本語の方はその数が非常に多い。このことは、日本社会はネガティブ・ポライトネス文化社会であるというB & L (1987)の仮説を支持しているとも言えるが、表2から分かるのは、「敬意を払え」というストラテジーはSとHの親疎、上下に関係なく、普遍的に使われていることであり、B & Lの理論で日本語のポライトネスを十分に説明できるかどうかは疑問である。

4. 会話分析

この節では、日中両言語においてポライトネス・ストラテジーが現れる頻度に差が生じる要因について、B & L のポライトネス理論に基づき、実際の会話例を出しながら分析していく。

4.1 ポジティブ・ポライトネス

カテゴリーAの中の「聞き手と共通点があることを仮定したり、主張したりせよ」というストラテジーは、日本語においても中国語においても、ポジティブ・ポライトネスの各ストラテジーの中で一番多く用いられていることが明らかになった。このストラテジーでは、SはまるでHの代弁者のように発言している。すなわち、Hの知識はSの知識でもあるかのように振る舞い、相手の気持ちになって発話するのである。SがHの心情にできるだけ近づき、親しさを表わすという意図が含まれる。このストラテジーについては、形式的にも日中両言語はほぼ同一であるため、ここではこれ以上比較対照しないことにする。

A「Claim common ground お互いの共通の基盤を示せ」というカテゴリーの中の「Exaggerate (interest, approval, sympathy with H) 聞き手への関心、賛成、同情を誇張せよ」というストラテジー(ストラテジー2)については、日中両言語の表現形式に大きな違いが観察されたため、比較分析を行う。

- (1) 朱：我觉得您这个头发特别有特色，是染的吗？
(あなたの髪の色はとてもきれいだと思います。染めたんですか?) (会話3)
- (2) 朱：我觉得您是一个非常幸福的女人。因为您在事业上有那么好一个伴侣，在生活上也有一个非常好的伴侣。问题是在家里你是他的领导，是吗？
(あなたは本当に幸せな女の人だと思います。…お家ではあなたは彼をリードしているんでしょう?) (会話4)

例(1)(2)のように中国人はコミュニケーションをする際、Hとの親密さを強調するために「聞き手の私的領域」^{iv)}に踏み込む発話が多い(母, 2005)。日本語の直接相手を褒めるという形とは異なり、中国語では、「褒め+質問」という形がよく使われている。この例から分かるように、中国人は相手との年齢差に関係なく、お互いのプライバシーを相手と分かち合うことによって、二人の関係をより親密にしようとしていると考えられる。一方、質問形式を用いるのは、褒められた相手に負担(恥ずかしさ)を感じさせず、相手の視点をそらす効果があると考えられる。

これに対して、日本人の場合は、相手を賞賛する際、ほとんど例(3)のような「褒め」に留まり、相手の「私的領域」に踏み込む発話は観察されなかった。

- (3) K：(髪型) 本当に素敵、本当に個性的ですもんね。
S：カーブね、このカーブが難しいのよね。
K：そうですね。片側じゃなくて、両側ですからね。同様になっていてですね。
(会話A)

上記の例から、中国人は話し相手とお互いの私生活の情報を共有することによって親しさを示す

一方、日本人はより自分の私的領域を守ることを重視しているということが言えるだろう。

このストラテジーにみられる日中両言語間の文化的差異は、中国人日本語学習者にとって、学習の際に注意すべき重要な点と考えられる。

4.2 ネガティブ・ポライトネス

ネガティブ・ポライトネスとは、消極的なフェイスへの配慮を表現する、相手の精神的・物理的領域に侵入しないことを伝える (B & L 1987 : 129) ポライトネスである。表3と表4から日中両言語のポライトネスにおける一番大きな違いは、ネガティブ・ポライトネスにあることが分かった。実際に今回収集したデータの分析によれば、中国人もよく相手に配慮を示すネガティブ・ポライトネスでFTA (相手の面子を脅かす行為) を解消し、距離をおくような言葉遣いを使用することが明らかになった。さらに、日本語では「敬意を払う」表現が他のストラテジーと一緒に使われることがしばしば観察され、広範囲にわたって繰り返し用いられている。そのため、「敬意を払う」表現は、日本語ではB & Lが挙げる「敬意を払え」というストラテジーに当てはめることはできず、単なるストラテジーとして取り扱うことは難しいと考えられる。

4.2.1 Don't presume / assume (推定・想定するな)

(ストラテジー2: 質問、垣根表現を用いよ)

このカテゴリーにおいては、日中両言語において大きな違いが見られた。中国語のデータからこのストラテジーがすべての会話に観察された。使用数については、自分より年齢や地位が上の人に対して話す時は多くなり、逆に下の人に対しては少なくなるという結果が見られた。

垣根表現とは、不変化詞、語、句などの修飾表現を用いて、ある表現をより迂言的に表現するものである。表現内容を曖昧にすることにより、Hとの常識的な距離を保つことが可能となる。例を見てみよう。

(4) K: これはやっぱり特技だと思いますよ。モデルの方お喋りにならない方多いですからね。多分ね。

R: そうですね。 (会話N)

(5) H: 安産だったので、私は一泊して、一日で出て来ちゃったんですよ。

K: それはすごいですね。

H: でも、あの、多いみたいです、アメリカでは。 (会話L)

日本語では、例(4)(5)に見られる「多分」や「～みたい」「～らしい」など内容を曖昧にする言葉が多く使われている。これにより相手の状態を勝手に憶測したり、勝手に決めてかかるというような態度をできるだけ避けようとするのである。

これに対して、中国語の会話の中では「是不是(そうであるかどうか)」「能不能(できるかどうか)」のような選択疑問文がよく使われている。

(6) 朱: 在那时候大家门派观念那么强的时候, 常老师的父亲应该说还是一个改革派, 博采众家之长, 加上他女儿自己的特点, 终于形成了常派唱腔, 现在是不是可以这样说?

(昔皆の派系の意識が強かったです。常先生のお父さんは改革派と言えますね。皆の長

所を吸収して、自分の娘の特徴と融合して、「常派」を創り出しました。今、こう言えますか？<…言えるかどうか>

常：可以。……

(はい、確かにそうだと思います。…)

(会話1)

例(6)では、話し手がもうすでに周知されたことを視聴者に紹介している。それにもかかわらず、そのあとで、「是不是(そうであるかどうか)」というような選択肢を自分より年齢も地位も「上」の相手に与えている。話し手は自分の言い方が正しいかどうかという判断をする権利を聞き手に譲ることによって、相手の意見を尊敬しているという態度を表明している。ある意味では、敬語の少ない中国語ではこのような「質問や前置き、語調を和らげる表現」を通して、相手との距離を認識しながら、相手を尊重している意を表す効果があるといえるだろう。

中国語とは異なり、日本語ではこのカテゴリーのストラテジーの頻度は少ない。このストラテジーは話し相手と親しくない或いは相手が自分より地位や年齢が上である場合に使われるということが観察された。これは日本人が親しくない相手に対して話し手との常識的な距離を保つことをいつも心がけていることの表れだろう。

4.2.2 Don't coerce H (相手を強制するな)

ここでは、上記のカテゴリーの中に含まれている「敬意を払え」というストラテジーを中心に比較を行う。敬語を上手に使いこなすためには、人と人との関係、立場、役割をよく認識しておく必要がある。表3に示すように、中国人は自分より上の人に対して敬意を払うため、敬意を表す表現を使用する一方で、年下の人に対しては親疎に関係なく、殆ど敬意を表す表現を使わない。中国語には日本語のような体系的な敬語形式が存在していないため、中国語のポライトネスの表し方は、「中国語の敬語の待遇的な意味効力はその表現の文字通りの意味内容を介して伝えられた会話の含意に属する意味内容である」(彭国躍, 1993) と言える。

(7) 朱：您家里当时多少人？

(当時お家には何人いらっしゃいましたか?)

日本語においては、「(あなたの) お家・お宅」のような敬語はSが相手の年齢と関係なく、ごく自然に使われる言葉である。しかし、中国語では、自分より下の人に対して第二人称代名詞“你”の尊敬形“您”を使うと、ちょっと皮肉な意味になってしまい、誤解される可能性がある。日本語と違い、中国語においては、自分より下の人に敬意を表したり、距離を保ちたいときは、「Question, hedge (質問や垣根表現を用いよ)」というストラテジーの使用が一番効果的だと考えられる。

表4と表6から分かるように、日本語の場合、もちろん自分より下や親しい人より地位が上の人や親しくない人に対して、敬語がより多く使われている。それにもかかわらず、中国語のように目上の人に敬意を表すだけでなく、知らない人や親しくない人と話す時や、改まった場面で話す時などにも敬語が使われ、敬語の使用が社会習慣、社会的ルールとして構造的に組み込まれ、広範囲にわたって使われていることが明らかになった。こうした現象から、日本語における敬語の使用は、B&Lが挙げる「敬意を払え」というストラテジーに当てはめることはできず、単なるストラテジーとして取り扱うことは難しいと考えられる。これは、日本語の敬語はもともと品位や嗜みを表わすと言われていたことに通じるものであるが、B&Lの枠組みのような普遍的ポライトネス理論では

触れられていない言語使用の側面である。この点については、中国人日本語学習者も日本語を学ぶ時に、注意を払うべきである。

4.3 まとめ

ここでの分析から、日本語でも中国語でも、相手に親しさを示すポジティブ・ポライトネスでFTA（相手のフェイスを脅かす行為）を解消し、距離を縮めるような言葉遣いがよく使われていることが明らかになった。宇佐美（2001）の「日本語のポライトネスは積極的丁寧さに移行しつつある」という報告を確認することができた。

また、日本語の中に「敬意を払う」表現がほかのストラテジーと一緒に使われることがよく観察され、広範囲にわたって繰り返し用いられていた。中国人日本語学習者にとって、日本語の難しさは、語形そのものではなく、対人関係や社会的ルールを考慮しながら、社会的慣習に従って、場面に応じて使い分けなくてはならないところにある。このような使い分けを教授するためには、ここで行ったような談話分析に基づいた使い分けの指導が不可欠になってくるであろう。

次に、中国人はコミュニケーションをする際、聞き手との親密さを強調するために聞き手の私的領域に踏み込む発話が多いと母（2005）が主張したが、実際の会話から分かるように話し手と聞き手との関係が疎であり、且つくだけた話題に言及する際、B & L が提唱した相手との親密さを強調するポジティブ・ポライトネス・ストラテジーと、話し相手の持つ「他者から邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスを最大限尊重するネガティブ・ポライトネス・ストラテジーが共存している。この中国人のポライトネスの特徴も、今後より詳しく分析していく必要があるであろう。

最後に、ここでの観察と分析から、日中両言語のポライトネスにおける一番大きな違いは、ネガティブ・ポライトネスに対する使用上の認識の違いであることが分かった。特にネガティブ・ポライトネスの「敬意を示せ」というストラテジーについては、日本語と中国語の文法体系の相違が、両言語におけるポライトネスに対する認識および敬意を示す様式に大きな影響を与えていることが分かった。

5. 終わりに

本稿では、B & L（1987）のポライトネス理論に基づいて、実際の談話資料を用い、より円満なコミュニケーションを行なうために様々なポライトネス・ストラテジーが異なる言語体系や文化を背景とする日中両言語においてどのように使用されているのかを分析してきた。また、各ストラテジーに対応する両言語の表現形式を分析することによって、日中両言語のポライトネス表現の異同点を明らかにした。

データの量や質（「インタビュー」という公的な場面の会話のみであった）が限定されていたため、今回観察できなかったストラテジーもあった。より多様なデータを収集して、ストラテジーを観察していくことが今後の課題である。

文化による言語の相違点が出るのは、文法的なカテゴリーよりむしろ、人間関係が重要な要素となる言語のパフォーマンスにおいてではないだろうか。この意味で実際の言語使用を前提としている談話分析の枠内で試みる対照分析の意義は大きい。今後、談話資料を一層充実させ、談話分析の観点による日中両言語のポライトネスの特徴を究明していきたいと思う。

注

- i. 南不二男（1987）は敬語を日本型敬語と非日本型敬語と区別し、中国語を非日本型敬語としている。
- ii. 宇佐美（2001）「談話のポライトネス—ポライトネスの理想談話構造」
- iii. 日本語の訳は笹川洋子（1999：156-160）を参照。
- iv. 「聞き手の領域」には、聞き手の行動・聞き手に属する物や聞き手と近い関係にある人、情報など、聞き手にかかわる全てのことがらが含まれる。（鈴木1997：58）

参 考 文 献

- 泉子・K・ナイメード（1992）『会話分析』くろしお出版。
- 井出祥子他（1986）『日本人とアメリカ人との敬語行動』南雲堂。
- 荻野網男（1986）『日本人と中国人の敬語行動の対照言語学的研究』文部省科学研究費補助金研究報告書。
- 蒲谷宏，川口義一，坂本恵（1998）『敬語表現』大修館書店。
- グループ・ジャマシイ編著（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版。
- 陳原（1981）『言葉と社会生活』凱風社。
- 張黎，佐藤晴彦，内田慶市（1998）『中国語表現のポイント99』好文出版。
- 塚本慶一（2003）『中国語通訳への道』大修館書店。
- 津田早苗（1999）『談話分析と文化比較』リーベル出版。
- 林四郎・南不二男編（1974）『敬語講座⑧世界の敬語』明治書院。
- 東照二（1997）『社会言語入門』研究者出版社。
- 彭国躍（1999）『近代中国語の敬語システム—「陰陽」文化認知モデル』白帝社。
- 松岡弘監修（2000）『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 楊立明，郭春貴，孟広学（2002）『中国語で学ぶ中国文化基礎知識』東方書店。
- 好井裕明他（1999）『会話分析への招待』世界思想社。
- 李経緯（1999）『称呼語的語用論分析』軍事文出版社。
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press.
- Kaidi Zhan (1992) *The politeness strategies in the Chinese language*, The Regents of the University of California
- 宇佐美まゆみ（1997）「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」東京外国語大学『日本語研究年報』，145-59。
- 宇佐美まゆみ（2001）「談話のポライトネス—ポライトネスの談話構造構想」第7回国立国語研究所シンポジウム 第4専門部会，9-54。
- 宇佐美まゆみ（2000）「ポライトネスから見た＜敬意表現＞—どこが根本的に異なるか」『月刊言語』11（2001）18-25
- 坂本俊生（2001）「現代社会関係と敬語の可能性」『月刊言語』11（2001），34-42。
- 笹川洋子（1999）『アジア社会における依頼のポライトネス』『親和国文』33号，154-181。

- 鷹野由紀子 (2005) 『現代中国語の要求表現 — その使い分けに関する考察』 関西大学「中国文学会紀要」第26号, 155–182.
- 辻村敏樹 (1989) 「待遇表現と日本語教育」『日本語教育』69, 1–10.
- 母育新 (2001) 「待遇行動における日本人と中国人の比較—ポライトネスの視点からの考察」『麗澤大学紀要』第73巻, 209–225.
- 母育新 (2002) 「ポジティブ・ポライトネスから見た日中の比較 — 日本語教育の視点からの考察 —」『麗澤学際ジャーナル』10巻第1号麗澤大学 経済学会, 75–85.
- 松村瑞子・因京子 (1999) 「日本語会話におけるポライトネス — Brown & Levinson (1987) の妥当性を中心に —」『言語科学』34九州大学 言語文化部言語研究会, 51–60.